

機関番号：38002

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320091

研究課題名（和文） 地域（沖縄）の特性を活かした多言語学習用デジタル映像教材の開発と研究

研究課題名（英文） Research and Development of a Regional Culture-Oriented Multilingual Visual Resources

研究代表者

Janet Higgins (ジャネットヒギンス)

沖縄大学・人文学部・教授

研究者番号：70235802

研究成果の概要（和文）：沖縄という地域性に立脚した外国語学習を実現するために、国際通り、壺屋といった伝統的な観光地を仮想的ツアーによって体験しながら、そこで出会うさまざまな事物・事象と、そこで生じるとされる典型的な会話場面を多言語（英語・中国語・日本語）によって構築し、地域性を最大限活用した外国語学習の一つのモデルを提案した。このモデルは単なる参照的な教材としてだけでなく、ディクテーションやクイズ、さらには現場でのインタビューをも含んだ学習機能を備え、地域性だけでなく効果的な外国語学習法への示唆も含むものである。

研究成果の概要（英文）：This project proposed a resource model for learning foreign languages based on regional cultures by constructing a visual dictionary focusing on the Okinawan culture in three languages (English, Chinese, and Japanese). The model is designed with a virtual tour of typical sight-seeing destinations such as Tsuboya and Kokusai Dori. Besides the referential function attained by the visual dictionary, effective ways of learning foreign languages such as dictation, quizzes, and authentic conversations are used to enhance the quality of the model for language learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総計	7,500,000	2,250,000	9,750,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：沖縄、英語、中国語、多言語学習、映像辞典、CALL、地域密着型、語学

1. 研究開始当初の背景

従来の外国語教育で利用されている教材は、作成された地域の文化を前提に作成されており、例えば、英語では“beets”や“mantel”など欧米では一般的であるが、沖縄ではほとんど見かけることのない事物、事例が取り上げられることがあるが、沖縄では一般的な「石巖當」や「ヘチマ」についての記述は見

られないなど、沖縄の学生にとっては、取り上げられる項目に偏りがあり、実用性に欠けきらいがあった。そこで、英語・中国語教育担当の教員の中から、沖縄や東アジアに焦点をあてた、（欧米で制作されたものを補完できるような）沖縄の学生に実用性の高い学習教材を求める声があがっていた。そこで、平成17年度よりこうした沖縄という地域性に

根ざした教材の研究・開発がスタートした。まず、平成 17 年度に沖縄大学地域研究所の共同研究班として本プロジェクトは本格的にスタートしたが、限られた予算 (30 万円) では、基本構想をまとめるなど具体的な教材作成に取りかかるにはあまりに困難であることから、科研費・基盤研究 (C) の申請にいたり、平成 18 年度より 2 年間補助を受けて、教材作成に取りかかった。

まずは、陸路のない沖縄の唯一の玄関である空港 (到着編及び出発編) を取り上げ、ここで旅行者が目にしたたり、遭遇すると思われる事物・事象・会話を取り上げ、辞書的なレファレンス機能のみならず、語学教材としての工夫が加えられた。しかし、空港の後に計画されていた沖縄一の観光地であり、沖縄の戦後を象徴する多文化の影響が色づく国際通りを舞台とした教材を作成するには、さらなる予算が必要となり、今回の基盤研究 (B) の申請につながった。

2. 研究の目的

(1) 本研究が発足した当時から、目指しているのは、沖縄という地域性を活かした語学教育の構築である。観光立県を目指している沖縄の地域性は、やはり観光を中心とするのが最も自然であり、本プログラムもその方針から沖縄の玄関である空港からスタートし、前回の研究 (基盤研究 C) においてほぼ完成に達した。今回の研究は、県内一の観光地であり、戦後の沖縄の復興と共に成長してきた国際通りを舞台に、学習者が疑似観光をしながら、そこで出会う数々の事物・事象・会話を通して地域文化に触れながら、現場と直結したリアルな外国語を効果的に学習するプログラムを開発することにある。

(2) 本研究開発の特徴 (独自性) は、CALL 教室や Web 上で利用できるデジタル教材であるという点と、沖縄という地域に根ざした言語教育の可能性を具現化したものであるという点にある。

まず、デジタル教材であることの独自性であるが、従来の写真または絵図中心の学習教材資料は書籍物では『Anchor 英語大辞典』(学研) や『KEEP 写真で見る英語百科』(研究社)、デジタル素材では Microsoft 社の ENCARTA のようにレファレンス用のみに作成された物が主であり、語学学習を主眼とした CALL 上で利用されることを目的とはしていない。逆に、CALL 上で運用されるソフトの多くは、言語運用力向上に目的が特化され、レファレンス機能には不向きであるものが多い。Oxford 社開発の *Picture Dictionary* は、レファレンス用に開発された書籍版を基に、語学学習のための様々なダイアログやリスニング課題を搭載した CD-ROM も開発しているが、こちらは mantel や beets など比

較的寒い地域を念頭に置いた語彙に偏っており、欧米社会中心の編集となっている。国際的な共通語として機能している英語や中国語などの言語学習のためには沖縄や東アジアの地域をも念頭に置いた教材が必要である。アジアに着目しているという点では、本名信行 (2002) 『アジア英語辞典』(三省堂) などは先駆的研究成果であるが、映像資料はなく、東アジア地域を射程にもしていない。以上のような理由から、本研究開発はこれまでの類似研究開発がまだ踏み入れていない領域を扱う極めて独自性の高い研究開発であるものと確信している。

次に、地域に根ざした言語教育という独自性であるが、沖縄は日本本土 (特に東京や大阪などの大都市) とは異なり、外国語使用の多くは観光に結びついている。しかしながら、多くの外国語教材は沖縄との関連性が薄く、実用的なものは多くない。沖縄を舞台にした語学教材はこれまでも *Feel in Okinawa* (桐原書店) や『沖縄の素顔 (Profile of Okinawa)』(テクノ) のような沖縄社会・文化に関する解説本が中心で、語学力向上を意図したものとはなっていない。このような状況下で、沖縄を舞台にした外国語学習教材開発のためのプロジェクトはそれ自体十分価値あるものであると思われる。一方、外国語教育の現場からすると、沖縄という多くの外国人と遭遇する機会が多く、観光地としても日本を代表する土地では、地域性を活かした言語教育が存立し得るのではないかと考えている。本研究開発は、これまでほとんど考慮されてこなかった「地域性を活かした外国語教育」の可能性を探求する他に類例を見ない極めて独自性が高い試みである。

また、すでに調査の途上から、那覇市観光課や那覇市歴史博物館などから協力が得られており、当該プロジェクトは大学が地域と協同で、地域文化を発信する人材の育成と、地域の活性化を推進するという新たな研究開発のあり方を提示するという点でも特色を持つものである。

3. 研究の方法

(1) 国際通り、壺屋、首里城など空港近辺の主要な観光地に関する事物 (シーサー、壺屋焼き、守礼門など)、概念 (もあい、ゆいまー等) を指示する語彙を引き続き抽出し、収集した。それぞれの地点の風景や事象を映像で描くように、キーワードとともに資料を収集する。特に、国際通りに関しては、琉球、中国、日本、アメリカ文化の影響をそれぞれの層 (layer) に分けて考察する必要もあるため、歴史的検証も不可欠である。

(2) それらの語彙に関する画像をデジタルカメラやビデオカメラで収集した。

(3) 抽出した概念語ごとに、日本語 (うち

な一ぐち訳)を付けた。英語と中国語の訳語に関しては、先行研究の成果などを参考に訳出を行った。その際、文化的相違のため、誤解や衝突が起こりやすいと考えられる語については、各語彙にそれぞれの言語による簡単な文化的解説を付けた。英語話者にとって注意が必要な点には英語で、中国語話者にとって必要な情報は中国語で記述した。

(4) 3でリスト化された概念語がもっとも頻繁に使われる場面、状況を考察し、適切な例文を付加した。その際に、学習者の習熟度の違いを想定し、複数のレベル(基本+中級など)を混在させた。

(5) それぞれの概念語とそれに関する例文、文化的解説を各言語で読み上げた音声を録音し、音声ファイルを作成した。

(6) Web 作成業者に、データと画像、映像ファイル、音声ファイルの一式を提供し、考案中の教材のフォーマットと機能を説明した上で、作成を依頼した。基盤と成るフォーマットは以下のような形式を取る(画面は空港の出発セクションにおける「バス」の項目)。



(7) それぞれの単語には、関連する画像と英語、中国語、日本語(時にうちなーぐち)の単語を付け、単語をクリックすると、音声が出るよう、音声ファイルとリンクさせた。また、簡単な選択問題や記入問題をページごとに用意した。画面中央には、項目の写真(「バス」は名詞なので静止画)が掲載され、右側にこの語を英語、中国語(簡体字版と繁体字版の2種類を用意)、標準日本語(東京出身者、時にうちなーぐちも使用)の音声が出るようになっていた。写真下の「使ってみよう」では例文の音声が出る。例文のスク립トは用途に応じて見られるようになっていた。さらに、クイズ機能も盛り込まれており、単語クイズの機能とディクテーション機能を搭載できるよう設計している。

4. 研究成果

(1) 本研究は、まず前研究(平成18年度~平成19年度)から引き続き、沖縄一の観光地である国際通りに関する事物・事象に関して語彙収集と写真・動画などの映像収集を行った。その際、国際通りと連結している壺屋

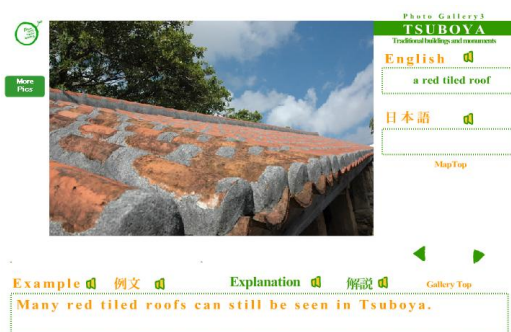
地区も研究対象に組み入れた。この地区は、「やちむん通り」と呼ばれる通りを中心に街が計画的に形作られており、観光もこの通りを中心に行うことから、本研究とは大変親和性のある街作りになっていることが大きな要因であった。ここでは、前研究から引き継いだ語彙学習機能のフォーマットだけでなく、数多く存在する項目をいち早く辿り着くために、インデックス機能として以下のような photo gallery 機能を追加し、特定の目的を持って臨んでいる学習者の便宜を図っている。



実際に gallery に掲載された写真のいくつかはやちむん通り上のどの場所で出会うことができるのかを下記のような地図と連携して確認することも可能になっている。



さらに、この gallery 機能とリンクした学習画面は、下記のようにしており、基本的に従来のフォーマットを踏襲している。



(2) 外国語学習に際しては、初級から上級に至るまで利用可能な語彙学習機能だけでなく、中級以上の学習者にとって参考になる会話学習を組み込むことが、効果的かつ段階的な外国語学習教材としては必要となる。そこで、例えば、壺屋地区においては、この地区の中心となる「やちむん通り」を設計した建築士との日本語と英語によるインタビューをそれぞれ収録し、内容を文字化してスクリプトも収録した(設計者は日本語と英語の両言語に堪能であったため可能となった)。スクリプトに関しては、難解な語や注釈が必要な箇所も若干含まれているので、その部分についてはアノテーション機能を付けて、学習者の必要に応じて参照可能にしている。インタビューの内容は、事前に建築士と詳細な点にわたり協議を重ね、4～5分程度のインタビューではあるが、この通りがどのようなコンセプトと経過により形成され、この地区においてどのような存在として機能しているのかがわかるように構成されている。また、まったく同様の調整を日本語と英語それぞれにおいて行い、基本的な内容自体は言語により相違はないのであるが、単なる翻訳にならないよう、それぞれ独自に収録されたため、会話の導入から、展開から集結部に至るまで、日英語の会話様式の相違が伺えるように展開されている(たとえば、相づちの回数が日本語では格段に多く、一方英語では、内容的な繰り返しが何度か行われるなど会話のストラテジーの相違を見いだすことが可能になっている)。これにより、内容面での学習だけに留まらず、中級以上の外国語学習者にとって、典型的な会話様式の相違が容易に比較考察できるようになっている。この場面においては、音声に集中することを目的としているので、内容に登場する写真のみを提示するとどめ、下記のような画面から、使用言語と字幕言語を選択できるようにしており、複数の言語を同時に学習し、それらの言語特徴及び会話特徴を学び取ることを容易にする工夫がなされている。



(3) 地域文化に立脚した外国語学習教材とはいえ、十分な学習効果が期待できるような機能を兼ね備えていないと、学習者が常に利用する教材としての価値が減じられてしまう。そうした学習教材としての機能を高める

ために、今回の研究では、クイズ機能やディクテーション機能を搭載し、学習した語彙を、音声を手がかりに回答して、学習状態をチェックしたり、例文で用いられた文の音声を元に書き取り作業を行うことにより、十分な学習の定着がなされているかを確認する機能を組み込んだ。これについては、予算が予想以上に必要となったが、これらを搭載していないモデルを試用した学生からは、こうしたクイズ機能などのない学習教材は、長続きしないとの評価が複数寄せられたため、若干の作業工程を修正して、この機能を組み入れた。例えば、下記の画面のように、音声を聞いて正しい単語をタイピングすることで単語を学習する機能とディクテーション作業が行われ、随時音声を再生することを可能にし、さまざまなレベルの学習者にも対応できるように配慮がなされている。単語については、辞書機能で用いられた画像もしくは映像(原則として名詞の場合は画像、動詞の場合は映像を用いている)がヒントとなるようにしてある。



(4) CALL を利用した学習および教授法が進んでいる欧州において開催された CALL 関連学会において、本研究代表者による発表が複数回行われた。欧州においても、地域性を活用した学習プログラムが十分に開発されてはならず、本研究が開発しているプログラムは大変注目を浴びたが、学習履歴をチェックする装備が不十分であることや、搭載されている文例がまだまだ少ないなどの指摘も受けた。今後はこうした点を取り入れ、また海外の研究者とも情報交換しながら、地域に立脚しながらも地域を越えた協力関係を築き上げ、さらなる開発を検討していく必要がある。今回は、予算だけでなく研究チーム内の不測の事態も重なり、予定されていた首里地区までは展開することができなかったが、すでに現行のプログラムを、那覇市近郊の市町村から「町おこし」、「シマ興し」の一環として協力できないか、あるいは iPhone などのスマートフォンでも利用できるようになら

ないかなどの打診もあり、今回の研究活動によって得られた数々の知見と開発成果は、地域社会との連携によって今後も継続されていくものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① Janet M.D. Higgins, Motivating learning using multilingual CALL lexical resources: A regional culture-oriented Multilingual Visual Dictionary Project. *Procedia - Social and Behavioral Sciences (Proceedings of EUROCALL 2010 Conference)*. 査読有り, vol.34, 2012, pp. 94-99.

② Janet M.D. Higgins, Culture-focused learning in the EFL classroom: Materials and approaches. *Proceedings of the 1st International Conference on Language Teaching and Applied Linguistics*, 査読有り、vol 1, 2011, pp. 664-670.

③ Janet M.D. Higgins, Providing web-based multilingual lexical learning materials with a regional culture oriented focus. *Proceedings of the 1st International Conference on Language Teaching and Applied Linguistics*, 査読有り、vol 1, 2011, pp. 660-663.

[学会発表] (計3件)

① Janet M.D. Higgins, Motivating learning using multilingual CALL lexical resources: A regional culture-oriented Multilingual Visual Dictionary Project. EUROCALL 2010 Conference, September 8-11, Bordeaux, France.

② Janet M.D. Higgins, Culture-focused learning in the EFL classroom: Materials and approaches. 1st International Conference on Language Teaching and Applied Linguistics, Sarajevo, May 5-7 Bosnia and Herzegovina.

③ Janet M.D. Higgins, Providing web-based multilingual lexical learning materials with a regional culture oriented focus. 1st International Conference on Language Teaching and Applied Linguistics, Sarajevo, May 5-7 Bosnia and Herzegovina.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Janet Higgins (ジャネット ヒギンズ)
沖縄大学・人文学部・教授
研究者番号：70235802

(2) 研究分担者

伊藤 丈志 (ITO TAKESHI)
沖縄大学・人文学部・准教授
研究者番号：30341671

渡邊 ゆきこ (WATANABE YUKIKO)
沖縄大学・人文学部・准教授
研究者番号：60320529